

内略○中兼余藤原參御前、暫候之間、或人云、攝政參給之間、於途中有事歸給了云々、余驚遣人令見之處、事已實、攝政參給間於大炊御門堀河邊、武勇者數多出來、前駈等悉引落自馬了云々、神心不覺、是非不辨、此間其說甚多、依攝政殿不被參、今日議定延引之由、光雅來示略○中凡今日事不能左右、不如道路以目、只恨生五濁之世、悲哉悲哉、廿二日戊辰、昨日事巷說種々、但前駈五人之中、於四人者、被切本鳥了、又隨身一人、同前駈五六許、于今在大路、見者所談也、前駈五人、高佐、高範、家輔、通定、六位一人不知名、此中通定一人不失、警云々、猶武勇之家、異他歟、如何、

〔曾我物語一〕いとうの次郎とすけつねがさうろんの事

くだう一郎は、なまじひの事をいひいだして、おちに中をたがはれ、ふさいのわかれ、まよたいは、うばはれ、身を、きかねて、きもをやきける間、きうじもそらくになり、にけり、さればにや御きまよくもあしく、はうばいもそばめにかけて、せきう、つたえがたく思ひこがれて、ひそかに又本國にくんだり、おほみのしやうにちうして、としころのらうどうにおほみの小太郎、やかたの三郎をまねきよせて、なくくさ、やきけるは、をのくつぶさにきけ、さうでんのまよりやうをわうりやうせらる、だにも、やすからざるに、けつく女ばうまでとりかへされて、といのや太郎にあはせらる、でう、口おしき共あまりあり、いまはいのちをすて、やひとつ、いばやと思ふなり、あらはれてはせんことかなふまじ、われ又びんぎをうかゞは、人にみしられて、ほんいをとげがたじ、さればとてとまるべきにもあらず、いかせん、をのくさりげなくして、かりすなどりのところにて、も、びんぎをうかゞひ、やひとついむに、や、もしまゆくいをと、げんにおきては、ちうをんじやうく、せ、にもほうじてあまりあり、いかせん、とぞくどきける、二人のらうどうき、一どうに申けるは、これまでもおほせらるべからず、ゆみやをとり世をわたると申せ共、ばんじ一しやうはいちごに、一ど、こそ承れ、さればふるきことばにも、やぶれやすきときは、あ